

2:なぜ日本では、世界的な ART マーケットが育ちにくかったのでしょうか？

日本の百貨店は、長年かけて築いてきた信用によって、アート市場においても非常に大きな販売量を生み出してきました。それ自体は、日本独自の優れた文化でもあると思っています。

ただ一方で、日本には古くから「絵を売り買いするのはどこか卑しいことだ」という価値観が根強くありました。そのため、“価格”や“資産性”について語ることを避ける空気があったように思います。

結果として、多くの作品は「どこに飾るか」という文脈でのみ選ばれてきました。もちろん、暮らしを豊かにするという意味で、それは大切な文化です。しかし世界の ART マーケットでは、作品は単なる装飾ではありません。作家の思想や社会との接続を含めて評価され、その価値が共有されていきます。

私は、これまで日本で大量に流通してきたものの多くが、世界基準で見ると“装飾としてのアート”に留まっていたことで、日本のアートシーンが国際的な評価軸の中に入りきれていないのではないかと感じています。

実際、台湾で作品を紹介した際には、「どんな思想を持っているのか」「今後どう評価されていくと思うか」といったような質問を多く受けました。彼らは作品そのものだけでなく、“価値が形成されていく過程”に関心を持っています。

一方、日本では「新築の家の玄関に飾る絵を探している」といった動機が、まだ中心にあります。つまり、“所有して育てる”というコレクション文化が育っていません。

だから私は、単に作品を販売するだけではなく、「なぜこの作品が存在するのか」「なぜ世界がその作家を評価するのか」といったような思考を共有する場をつくりたい。その積み重ねが、日本に本当の意味での ART マーケットを育てていくのだと思っています。